

筑紫野市指定文化財

やま え しゆく え び す せき ぞう
山家宿の恵比須石像

～宿を見守った、400年～



石像正面(建てられて400年経ちます)



石像裏面の銘文(拓本)

當町初建之吏

去慶長拾六年辛亥十月上旬播州之住人
桐山丹波守創造之□□□刻一基之石像
為国家安寧斯地長久□□
皆寛永拾年□□□□ 志方彦太夫立之

山家宿のほぼ中央、長崎道沿いに建てられている恵比須石像の背面に縦書きで彫られているのがこの銘文です。

『この町(宿)は慶長16年(1611)10月上旬けいちようの**播州**(兵庫県西部 註1)出身の桐山丹波守きりやまたんばのかみが造り、その時に国の平和が長く続くようにとこの石碑を彫った。寛永10年(1633)に志方彦太夫しかたひこだゆうが建てる』

ということが記されています。ここに出てくる

「桐山丹波守」と「志方彦太夫」とは何者なのでしょうか。

戦国時代は、関ヶ原の戦い(1600年)により幕を下ろします。当時、徳川方で参戦した黒田家は、功績を称えられ筑前国を拝領し、家臣とともに領地を治めます。黒田家には「黒田二十四騎」と呼ばれる武芸に秀でた武士達がいました。桐山丹波守はその1人で、彼は御笠郡一帯を治めることとなります。家臣である志方彦太夫の銘文から慶長16年に開宿をしたのが丹波守ということが判り、冷水峠ひやみずとろげが開通したことによって長崎道が完成したと想像することができます。この銘文は、山家宿の成り立ちや、彼らの功績を証明する上で重要であるといえるでしょう。



石像正面の拓本(鯛を抱きかかえ、釣竿を持っています)

恵比須様についてご存じですか。記紀神話の中で、イザナギとイザナミの子(ヒルコ)として生まれます。海で不時に打ちあがる海産物や大漁とつながりを見いだされ、今日では七福神の一人として豊漁の神様、繁栄・繁盛の神様として祀られて親しまれています。

さて、大きな石に彫られた山家の恵比須様の姿に目を向けると、通常見られるものとは少し違います。スリムな顔立ちに狩衣をまとい、立烏帽子を被ったその姿は、まるで位の高い公家・武士のようです。県内にある他のものには見られません。このモチーフの元を探ると、兵庫県西宮市の西宮神社に祀られている傀儡子の祖、百太夫に姿が似ています(註2)。もしかすると、山家宿の恵比須様はこの容姿を模しているのかもしれませんが。桐山丹波守も同じ兵庫県出身ですので、恵比須様の縁起の良さに願掛けて、これを祀ることにしたのかもしれま

せんね。

ともあれ愛嬌のある鯛を抱え、胡坐をかいた恵比須様は400年もの間、人々の往来を見つめてきました。これからも宿のシンボルとして訪れる人々を見守り続けることでしょう。

(海出 淳平)

銘文：金属や石などに記された文字資料のこと。

この銘文には異体字が使われています。

註 1：現在は銘文が風化して読みづらくなっていますが、播州ではないかと考えられています。

註 2：西宮神社の百太夫神札に図柄が描かれています。

関連号：ちくしの散歩4「江戸時代の道」

ちくしの散歩5「山家宿(1)」

ちくしの散歩99「桐山丹波守孫兵衛」